14 「農民のために」

―堀之内（ほりのうち）　良限房（りょうげんぼう）―

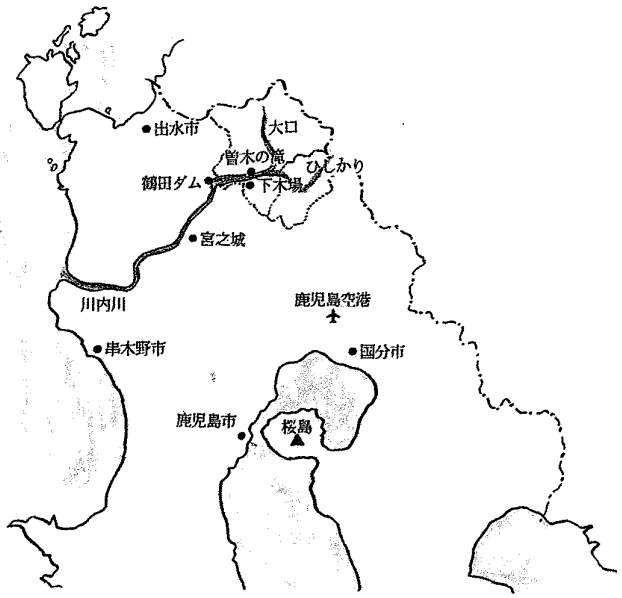
今からおよそ百六十年前、日本中が大ききんとなり、多くの人々がまずしく苦しい生活をしていたころの話です。

鹿児島県の北部に位置（いち）する大口、菱刈（ひしかり）地方の農民も例外ではなく、まずしく苦しい生活をしていました。しかも、さつま藩（はん）からのお米の取り立ては年々きびしくなり、こまった末（すえ）に、自分の生まれ育った土地をにげ出す農民さえありました。そんなつらく苦しい生活から農民を救おうと立ち上がった人がいました。堀之内良限房です。

良限房はお寺のおぼうさんでしたが、山ぶしとしてきびしいしゅ業も続けていました。苦しさのあまり、良限房においのりをしてもらう農民は増えるばかりでした。すっかりやせ細った体で、なみだながらに話す農民たちの苦しみを知り、いのりを続けるうちに、良限房は農民たちを何とか救ってあげなければという気持ちが強くなっていきました。

当時の農民を苦しめていたことはたくさんありました。病気が流行

し、牛や馬が死んでしまったこと。田は水はけが悪く、しかも害虫が発生し、お米がよく取れなかったこと。生活にこまって農具や牛・馬を売らなければならなかったこと。中でも、藩におさめる米（年貢）を四十キロメートル以上もはなれた宮之城まで運ぶ仕事は、大変な苦労でした。今のような通りやすい道ではなく、せまくごつごつした山道を、つかれた体にむちうちながら、自分で運ばなければなりませんでした。また、宮之城についても、米をおさめる人が多く、けんさをうける自分の番がくるまで、二・三日もかかることがたびたびありました。そのため、野宿をしたり、お金を出してとまったりしなければなりませんでした。



そこで、良限房は、お米を藩におさめる苦労をどうにかしてなくす方法はないかと考えました。そして、曽木の滝の下にある下木場に米倉を作り、そこから川内川を下り、宮之城まで船で米を運ぶというとてつもないことを考えつきました。（下木場までなら近いので、大口や菱刈の農民もお米を運ぶのは楽になるぞ。）と考え、川内川を船が通れるように工事（川ざ

らえ）をすることを思いついたのです。

良限房は、自分で実際に下木場から宮之城まで、川の流れの速さや岩の様子などをくわしく調べました。人がかん単に入ることができないくらい草や木が生いしげっていたり、がけのあるきけんな場所などが多く、調べるのはとてもたいへんでした。また、工事をするための石工（石をくだいたりする仕事をする人）や材料などがどれだけ必要かなど細かいところまで、苦労して調べて、計画書を作成しました。良限房も生活は苦しかったのですが、調べるのにかかったお金はすべて自分のお金から出していたのです。

「よし、これで農民を救うことができるぞ。」

さっそく良限房は、計画書をもち、村の人に協力してもらおうと相談に行きました。ところが、

「毎日食っていくのに、せいいっぱいだ。とても工事の手伝いなんてできねぇ。」

「川の底をほるなんて、そんなことできるかのう。無理ではないか。」

と、だれ一人、工事を手伝うという人はいませんでした。ある時などは、

「そんな夢みたいなこと、できるわけがない。できたら、ひょうたんで

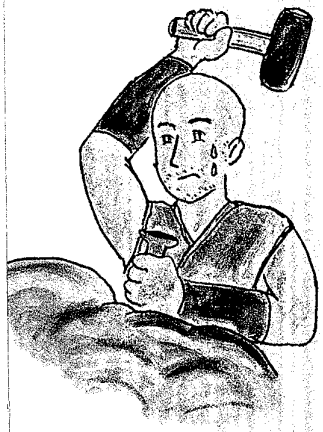
はらを切ってもいいぞ。」
と、みんなに笑われたこともありました。それでも、良限房はあきらめず、何度も何度も相談に行きました。そのたびに、めいわくだと言わんばかりにおい返されました。だれ一人さん成する者もなく、くやしい思いをした良限房は、（やはり、ここの計画は無理なのか…。自分の家族やしんせきの人も笑われることになる。やめようかな。）と、なやむようになりました。
そんなある日、藩の役人の前で、工事の説明をする機会をえることができました。良限房は、堂々と自分の考えを説明しました。役人は、良限房のしっかりしたたい度や人がらを見ぬき、
「おまえは、農民のために苦労して、くわしい工事の計画を立てたな。ご苦労だった。」
とほめました。そして、
「もし、工事が失敗したら、自分だけでなく、家族やしんせきの人すべての人が笑われ、大変なことになるがどうする。」
と、たずねられました。良限房は、
「米を船で運ぶことができれば、農民はとても助かります。命をかけて仕事をする気持ちです。」
と、きっぱり言い切りました。こうして、良限房は工事のせきにん者となり、工事をするゆるしをもらうことができました。

川内川は流れがはげしく急で、大きな岩がごつごつしている所が三十数か所もあり、大変な工事となりました。大きな岩を金づちで打ちくずしたり、木のかっ車でひっぱったりする方法で作業を進めていきました。特に、川の底にある大きな岩を取りのぞく作業は大変な苦労でした。まず、土(ど)のうをつんで川の水をせき止め、岩の上でどんどん火をたき、真っ赤になるまで岩を焼きます。次に、せき止めていた川の水を流し、いっきに冷やすことで岩にひびを入れ、それを金づちで打ちくだいていくのです。この方法を何百回、何千回とくり返していきました。

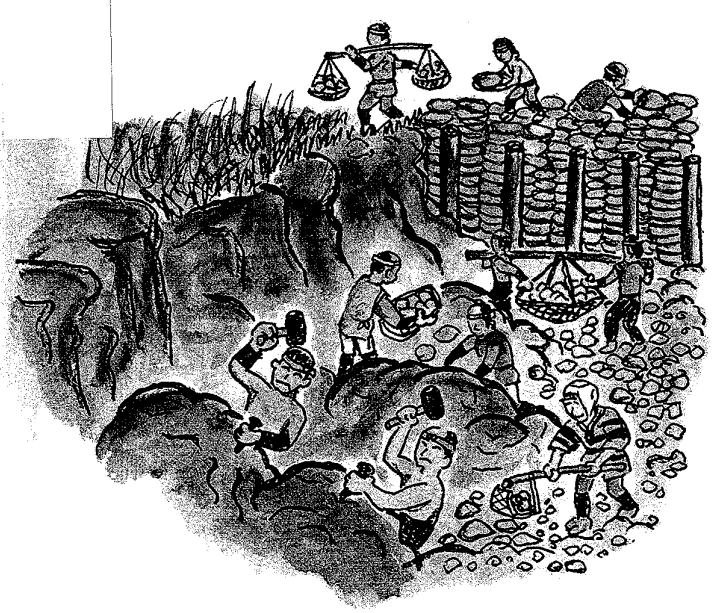
「水を止めたぞー。さあ、火をどんどんたけ！」

「おうい急げ急げ。土のうから水がもれ始めたぞ。」

「あっ、あぶない。にげろ！」

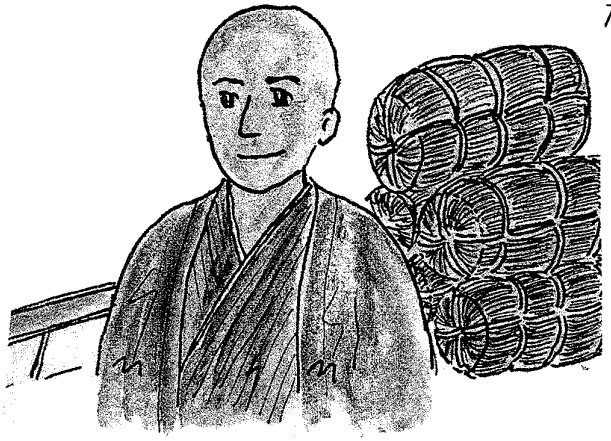


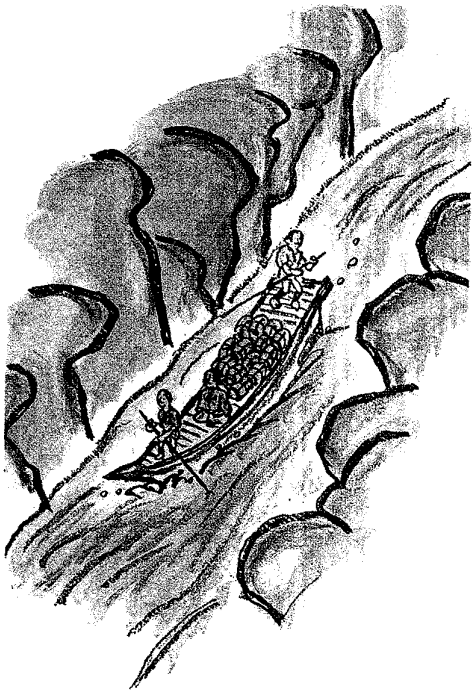
水がいきおいよく流れ出し、働いていた人たちがきけんなめにあうこともたびたびでした。こうしたきけんな仕事が続くため、良限房は工事を続けるかどうかなやむこともたびたびでした。（しかし、ここでやめるわけにはいかない。）と自(みずか)らも大きなのみをもち、作



業にあせを流すのでした。工事を始めて二年五か月、やっと完成しました。

船を初めて通す日、多くの人々が見守る中、米だわらを積み、良限房を乗せた船は川内川の急流に乗り、たくさんのはく手の中を矢のように速く川を下っていきました。二時間後、宮之城についた良限房に、ここでも多くの人々のかん声とはく手が送られました。良限房は、船の上でこれまでの苦労をふり返り、喜びをかみしめていました。





その後も、良限房は、田のはい水をよくするための工事をしたり、ため池を作ったりする工事などをしました。また、農具を作ったり農作物のひ料を作ったりして農業の開発にも努力しました。